

Atsuko Kudo Mail Magazine 222

2016.10.14 ●Brasil

お元気でいらっしゃいますか？

9月5日～10月4日、一か月に亘ったブラジル・ツアーを無事終え、7日大阪に到着しました。

日本の22倍もある広大なブラジルを、ブラジリア、カンポ・グランジ、タンガラ・ダ・セーハ、マリリア、ポンペイア、ポルト・アレグレ、カンピーナス、サン・ジョゼ・ドス・カンポス、サン・パウロと、合計6,000キロを旅しながら、10回のコンサート、2回の礼拝メッセージ+賛美、2回の賛美セミナーをさせていただきました。飛行機、車の中ではひたすら睡眠を取り、体調も守られ、すべて感謝な奉仕をさせていただくことができました。背後で捧げてくださる皆さんのお祈りをひしひしと感じました。ほんとうにありがとうございました！（写真：ブラジルの国花、イペー）



今回のコンサートは、ブラジル日系キリスト教連盟によって組織された「工藤篤子ブラジル・コンサート実行委員会」の皆さんが、今年の一月から毎月一度会議を開いて、準備を進めてくださいました。私もLINEやスカイプでドイツから会議に参加。便利な時代になりました。実行委員長の斎藤齊（ひとし）先生を始め、すべてのコンサート・セミナーに同行して下さったサン・パウロ在住のピアニストの宮島紀子（みちこ）さんが、ピアノ伴奏だけでなく、通訳、コンタクト、準備など、細やかなお世話を献身的にしてくださいました。また各地でコンサートを企画して下さった教会・集会・団体の皆さま、宿泊先の皆さまに、

紙面をお借りして、心からのお礼を申し上げます！（写真：ブラジル・ツアーの最後のコンサート、10月1日、サン・パウロ市文協ホール）



●山本ファミリー（カンポ・グランジ）

カンポ・グランジは、南マット・グロッソ州の州都。ここに、日本から、特に沖縄から多くの人々が移民しました。現在人口 80 万人、そのうち、一割が日系人です。

9 月 10 日（土）、11 日（日）にコンサートをさせていただいたカンポ・グランジ・ホーリネス教会は、500 人ほどが集う大きな教会です。この教会から、これまで多くの献身者が各地に遣わされて行きました。

この教会の基礎を築いたいくつかの移民ファミリーがあります。

そのひとつが、山本ファミリー。7 人兄弟の長男、山本彰さんは、ある日、神様から「カンポ・グランジに行け」という召しを受けました。1956 年、山本さんは、兄弟 7 人とともにカンポ・グランジに移り、皆で力を合わせて野菜を作って販売するようになりました。しかし、事業が失敗し、兄弟 7 人が一生働いても返せない額の借金を負ってしまいました。兄弟は、とにかく頑張ろうと励まし合いながら働きましたが、ある日、主に対して借金があることを示されたそうです。兄弟は、事業の負債を返すことが精一杯で、教会への十一献金を捧げていなかったのです。山本さんは、神への借金を返すことが先と示され、どんなに生活が苦しくとも、まず十一献金を捧げるようになりました。そうしたら、不思議なように事業がうまく行くようになり、10 年後には、借金が返せたばかりでなく、事業が拡大して行きました。

この山本ファミリーの信仰、生き方、家族の愛の絆を見て、カンポ・グランジの日系人がどんどん信仰を持つようになりました。今では数えきれないほどの大ファミリーになった山本家。その多くが、カンポ・グランジだけでなく、ブラジル各地で神のしもべとして仕えておられます。（写真：通訳の奉仕をしてくださった山本ファミリーのメルシアさんと）

●仏教徒の皆さんに（ポンペイア、マリリア）

ポンペイアでは、4 日間、西村二郎さんのお宅にお世話になりました。お父様の西村俊二さんは、この地で、「ジャクト」という農業機械を開発・製作・販売する会社を建てました。その事業は、農業技術を教える学校、さらには、貧しい子供のための学校などの福祉事業へと拡大して行きました。（写真：右が西村二郎さん、奥様のひろみさん、左が宮島紀子さん）



9 月 17 日、ポンペイアの日本人会主催のコンサートで歌わせていただきました。それが、教会ではなく、日本人会の主催であること、そのほとんどが仏教徒の方々であることを把握していなかった私は、最初に「いくしみ深き」を皆さんで歌い、いつものように、大胆に賛美と証しをしました。

終わってから、日本人会の会長さんが「たくさんの素晴らしい讃美歌を歌ってくださってありがとうございました」とおっしゃいました。後で、会長さんは、熱心な仏教徒であることを知りました。同行してくださったクリスチャンのご婦人が、「高齢の日系人がイエスさまを知らないでどんどん亡くなって行くことがつらくてならなかった。今日、皆さんが初めて福音を聞いた。これから、私たちが伝道を引き継いで行きます」とおっしゃいました。

前日のマリリアでのコンサートにも、主催された自由メソジスト教会が日系敬老会の皆さんを招いたので、多くの日系人が来られました。こちら、多くが仏教徒です。でも、皆さんの心に証しと賛美が響いたようでした。お坊さんであられる日本人会の会長さんも、「よかった、感動しました」と言って帰られました。仏教徒の皆さんが、真の神を知ることができますように！

●ドイツ人の町（ポルト・アレグレ）



9月20日、ブラジルの南端、南リオ・グランジ州の州都ポルト・アレグレのルーテル教会でコンサートをさせていただきました。リオ・グランジ・ド・スウ州は、200年前、多くのドイツ人が入植した地です。その中に多くのクリスチャンがおり、ここにルーテル・ドイツ人教会を建てました。

ポルト・アレグレ在住の日系人はわずかですが、日本領事を始め、市在住の多くの日系人、そしてたくさんのドイツ人が来てくれました。ドイツ人たちは、ドイツ語の賛美を聞いて涙を流しておられました。

ちなみに、9月13日にコンサートをさせていただいたタンガラ・ダ・セーハは、ポルト・アレグレに入植したドイツ人の一部が後に移り住んだ町でした。ドイツ人移民の子、孫たちの多くは、今に至るまで、ドイツ人としてのアイデンティティを誇りとし、ドイツ語とドイツ文化を守っています。

このコンサートを企画してくださったのは、ポルト・アレグレの小さなポルト・アレグレ・日系キリスト教連盟の集会です。10人ほどの集会の皆さんが一致団結して伝道コンサートのために尽力してくださいました。集会に、主の溢れる祝福がありますように！

●一世の救い（サン・ジョゼ・ドス・カンポス）

9年前、サン・ジョゼ・ドス・カンポス市の劇場でコンサートをさせていただきました。今回は、ホーリネス教会と自由メソジスト教会の共同主催で、ホーリネス教会の大きな会堂でのコンサートでした。多くの日系人が来られました。でも、9年前には、まだ日本語を話せる方々が多かったのですが、一世の方は少なくなり、あまり日本語を話せない二世、三世の時代になりました。

しかし、この町では、今、多くの一世が救われているのだそうです。ホーリネス教会と自由メソジスト教会は互いに協力し合って伝道に励んでいます。この2つの教会の働きによって、特に、死を間近に不安を感じる高齢の多くの一世の方々が、福音に心を開き信仰に導かれているのだそうです。素晴らしいことだと思いました。この地上の生涯が終わる前に、ひとりでも多くの日系人が救へと導かれますように！



●2回の賛美セミナー ～主に喜ばれる賛美を求めて～

元々予定されていた10月3日（月）の賛美セミナーに加えて、9月24日（土）のソロカバでのコンサートが急遽キャンセルになったことにより、土曜日に、2時間半のショート賛美セミナーを開催できることになりました。これ



によって、学生や平日お仕事をしている人も賛美セミナーに参加できるようになりました。この日の参加は28名。大学生や若い方々も数名来られ、聖書的で貴重な学びができたと興奮して帰られました。

10月3日（月）の6時間の賛美セミナーには、60名の方々が参加されました。参加者の多くが牧師、牧師

夫人、教会奉仕者でした。最後の質疑応答は一時間に及びました。多くの方々が、疑問に思い、考えて来られたことであることを知りました。そして、貴重な示唆が与えられたようです。（写真：10月3日、セミナー参加者の皆さんと）

● 霊の戦い

ブラジルは65%がカトリック、25%がプロテスタントというキリスト教国です。しかしながら、カトリックの間にも黒魔術的スピリチュアリズムがあり、プロテスタントの中にも異端的な教会もあります。

9月25日のカンピーナスのコンサート会場では、前日に、カトリックと結びついたブラック・スピリチュアリズムの2つの団体が集会（礼拝）を開いたというので、3つの主催教会は、数日前から、会場の前で毎日祈りました。前日に到着した私も、その祈りに加わり、主が小羊の血潮を注いで悪の力の影響からきよめてくださるよう祈りました。（写真：カンピーナスのコンサート前の祈り会）



神の働きが前進するところには、敵も巧みに攻撃をしかけてきます。ブラジルだけでなく、どこの国においても、目をさまして絶えず祈り、霊を見極める御霊を与えていただきながら、神をほめたたえ、キリストの勝利を宣言し、福音を宣べ伝えて行かなければならないと思っています。

● 日系人の忍耐

今回のブラジル訪問でも、各地で移民の皆さんのストーリーをお伺いすることができました。一世の多くの皆さんのご苦労は想像を絶するものがあります。



ブラジリアのコンサートを主催してくださった、ブラジリア・アライアンス教会の安井牧師のお父様は、「ブラジルに行ったらお金が儲かる」と聞き、幼少期におじい様と移民。サントス港に着き、そこから車で農地に連れて行かれたましたが、家もなにもなく、最初に寝たのがバナナの木の下。それから、皆で木を切って家を建て、時にマラリヤやデング熱にかかって生死をさまよい、重労働に耐えてきたとのこと。

2000年から数巻に亘って出版された「イペーの花さく地から」（一粒社）という本には、移民の皆さんの証しが綴られています。私たちの同胞である、ブラジルの日系人を知るために、多くの

の皆さんに読んでいただきたい本です。（写真：桜そっくりのピンクのイペー）